

『アルファの淫欲、オメガの発情 番外編』

著：高月紅葉

ill：minato.Bob

カザンノフの冬は長い。雪は降り続き、どこもかしこも白く染まる。

薬学研究所と宮殿を繋ぐ道は、朝昼夕に雪を搔く。しかし、夜になればすっかり元通りだ。灯りを持たずとも歩けるのは、それぞれの建物がほどよい距離にあり、新雪がきらめくからだった。

雪がチラチラと舞う中で、生真面目な顔だちのエラストはくちびるを噛みしめた。立ち止まらず、足早に冬用の入り口を目指す。積雪を考慮して、夏よりも高い位置に作られている。回廊が左右に伸び、そこにも雪が吹き込んでいた。さらに奥へ進めば宮殿の中だ。

夜番の警備に立っている男たちに会釈をすると、ひとりがスッと歩み出た。

「ゲラシム様から、お呼びがかかっています」

「いつのことだ」

鋭い口調で尋ねると、今し方、すぐのことだと返答がある。

しかし、彼らまで連絡が回るのに有した時間は不明だ。

エラストは雪よけのコートをひるがえし、ゲラシムの自室へ向かった。廊下を歩く足が逸り、胸がやけに痛くなる。

冬の間は窓が閉ざされる内回廊は静かだった。もう夜も更けている。

ゲラシムの部屋へ着き、エラストは扉を叩いたあと、中へ入った。円形の小部屋があり、扉が並んでいる。

寢室のドアを叩くと、低い声が返ってきた。すぐに開けるような不躰なことはしない。しばらく時間を置いて、ゆっくりと扉を開く。

すでに寝台へ入っていたゲラシムは寝酒を飲んでいたらしい。手にしたグラスには淡い色の液体が揺れている。

エラストは、夜の静謐な空気を乱さぬようにして、そばへ近づいた。

「お呼びとのことですが……。お待たせいたしましたでしょうか」

「いや、問題ない」

酒の入ったグラスを揺らすゲラシムは、どこか苦しそうに眉根を寄せた。凜々しい顔立ちに男ぶりが際立ち、エラストの胸の奥が騒ぐ。恐れ多くも第二王子に対して、心乱れたわけじゃない。

似たような表情を、見たばかりなのだ。その男も、苦悩を抱えていた。ふたりの男は、同じ人間に想いを寄せている。

「キリルはどうしているだろうな」

話し相手を欲していたのだろう。ゲラシムはぼそりと言った。

薬学研究所の研究者であるキリルはオメガだ。その正体を隠し、発情期を薬でごまかしていたが、生粋のアルファであるゲラシムの目は欺けなかった。

オメガがアルファの愛玩物になることは世のことわりだ。ゲラシムもそれに倣って、彼を支配した。

肉体関係と呼ぶにも生々しい略奪の関係だったが、第一王子の謀略で毒殺されかけたゲラシムをキリルが救い、なにかが変わった。

「日に日に回復しているとのことです。様子を確認して参りました」

「フェードトか」

名前を出され、エラストは思わず顔を歪めた。

「どうした」

ふっと笑ったゲラシムは酔っている。しかし、こんなにも穏やかに見えることは珍しかった。兄よりもよっぽど優れたアルファであるにも関わらず、第二王子に甘んじなければならぬ鬱屈にゲラシムはいつも苛まれていた。

侍従に取り立てられる以前から仕えているエラストは、彼のすべてを見てきた。頭脳の明晰さも、心の惑いも知っている。

エラストは心を隠して頭を垂れた。

「いえ……。今夜はご機嫌がよろしいようで、安心しました」

「よろしくはない」

ゲラシムの声が沈む。キリルのことを思い出し、酒を飲んでいたのである。

ゲラシムを救うために生き血を提供したキリルは一週間近く、この部屋にいた。捧げた血の量は多くない。しかし、生気を失い、青白い顔で眠っていた。

ゲラシムは彼をそばから離さず、付きっきりで看病していたのだ。ふたりはまるで仲睦まじい夫婦のように寄り添い、ときに甘くささやき合いながら口づけを交わしていた。

その記憶がないのは、キリルだけだ。意識は常に朦朧としていた。

体調を取り戻すほどに、キリルは甘えなくなり、ゲラシムに対する態度はよそよそしいものになった。ついには正気に戻り、家に帰して欲しいとエラストに泣きついたのだ。

「ゲラシム様が心配なさせることは、なにもないと……」

「それは、放っておけということだろう」

ゲラシムは酒を一口に飲んだ。視線で促され、エラストは酒の瓶を掴む。ふっと甘い匂いがした。

「これは」

「フェードト教授から届けられたものだ。父親の土産だと」

いまいまして口に持ったゲラシムは目を伏せる。差し出されたグラスに酒を注ぎ、エラストは花のような香りから顔を背けた。

「不満だろうな。エラスト」

「なにをおっしゃいますか」

勢いよく振り向く。ゲラシムの言わんとしていることは、確かめなくてもわかっていた。キリルへの想いだ。いつしか芽生えた、特別な感情。

「オメガは、アルファのものです。キリルも、あなたのものだ」

「……アルファがオメガに惹かれるのも、運命だからか。抗いがたいな」

ゲラシムの声は甘く響いた。そこには、もう疑いようもない恋の色がある。アルファだ、オメガだ、と理由を付けても、すべては後付けに過ぎない。

格差や差別を越えて、ふたりが歩み寄るための方便だ。

運命はただ、後押しをする。

それをエラストは近くで見してきた。

花の香りをさせる酒の味が、舌先によみがえる。胸がぎゅっと締め付けられた。

* * *

「少し、飲まないか」

フェドートが酒瓶を手に振り向いた。

「ゲラシム様とキリルの今後について、話をしておきたい」

あからさまに不満げな顔をしたエラストは、仕方なく手近なイスを引き寄せた。研究室の戸棚からグラスを取り出したフェドートは、それぞれに酒を注いだ。

繊細な模様が入ったグラスは美しい。目の高さにあげてマジマジと鑑賞していると、

「キリルの見立てだ。美しい模様だろう」

フェドートが言った。

「南の国に咲く花の図案だ」

「そうですか」

エラストはそっけなく答える。酒を口に含んだ。

甘い中にもキリッと鋭い酸味があり、なかなか味わい深い。思わずうなると、イスに座ったフェドートは満足そうに足を組んだ。

夜もすでに遅く、研究室にはふたりだけだ。

秘密の話をするにはいいと思い、エラストは自分から切り出した。

「キリルはオメガだ。ゲラシム様の保護下に入るのが当然のことだろう」

「悪いが、それは受け入れられない」

フェドートは臆することなく言った。エラストは鋭く睨みつける。

「ここへ置いておくということか」

「あの子には才能がある。いや、努力の末に掴み取った彼の實力だ。どれほどの苦勞だと思う」

「オメガなのだから、仕方のないことだろう。苦勞して教養を身につけさせたところで……」

エラストが話し終わるより早く、フェドートがテーブルを叩いた。ふたりは睨み合う。どちら

も譲らず、視線がぶつかって、見えない火花が散る。

「教養が必要なのは、そちらのほうだな。エラスト」

「オメガの色香に迷った学者風情には、言われたくないものだ」

「その学者風情に助けられたのは、おまえの大事なゲラシム様だろう」

挑戦的に言われ、エラストは鼻で笑う。

「そのゲラシム様が欲しいとおっしゃるのだ」

「ならば、それなりの態度で来い」

長い髪を首の後ろでひとつにまとめたフェドートは胸を反らした。カザンノフにおいて、薬学研究者の地位は高い。教授ともなれば、第一王子の侍従の比ではなかった。

「キリルが欲しいのなら、相当の覚悟をしてもらいたい。王子の愛玩物として召し上げるような扱いは、絶対に許さない」

「おまえが決めることか」

エラストは強く出た。自身の地位が低くとも、ゲラシムの立場がある。言われ放題でいるわけにはいかないのだ。

「どちらにせよ、結果は同じだ。キリルがオメガである以上は、ゲラシム様が死ぬまで、離れられないだろう。すでにふたりは関係を結んでいる。召し上げられるのが嫌なら、いっそ、どこか遠いところへやればいい。引き離れたほうが都合がいいのではないのか」

「……だれの都合だ」

そっぽを向いたフェドートはグラスの酒をあおった。

「自分のものにするはずだったんだろう」

答えたエラストも酒を飲み干した。それぞれ、自分で酒を足し、ほぼ同時に喉へ流し込んだ。

「エラスト。おまえに言うておく。手を出すなら、チャンスはいくらでもあったんだ。俺はこらえた」

「あの匂いによく耐えられたものだな。初めてのとき、介添えをしたが」

「黙れ」

次の一杯を注いだフェドートの声が低くなる。据わった目を向けられ、エラストも負けじと見据えた。

「聞いておきたくはないか？ それほどつらくなさそうだった。アルファの匂いにすっかり欲情して、自分から求めるようにほどけて……」

つらつらと話したエラストは、相手が静かなことに気づいて言葉を止めた。黙って聞いていたフェドートは、グラスを手に立ち上がる。背が高く、学者らしくすっきりとした佇まいだ。

「続けてくれ」

そう言われると、途端にやりにくくなる。エラストは、窓辺へ寄るフェドートを目で追った。

「続けないのか。キリルはそれから、どうした。おまえの介添えでほぐされて、おまえに押さえつけられて、そのときを迎えたか。そういうことが、オメガの宿命だと、おまえは本当にそんなことを疑いなく信じているのか」

「……当たり前だ」

「迷信だ。迷信だよ、エラスト」

窓の外に降る雪を見つめ、フェードトは窓枠にもたれた。

「あの子の振りまく匂いは寂しさの現れだ。オメガの色香の正体だ。それに惹かれる人間はもっと寂しいのだと思わないか。ゲラシム様の寂しさを埋めたいと、キリルは望むだろう。私は、それを、オメガの宿命だとは思わない」

「じゃあ、何だ」

「人の宿命だよ。……他人を好きになったことがあるか。その肌に触れたら、あたたかさに涙が出そうになるほどの寂しさを、おまえは感じたことがあるのか」

「くだらない話だ」

エラストは立ち上がった。その場を離れようとした瞬間、腕を掴まれる。

「あの子の寂しさを、わたしは埋められない。そんなことは知っていたさ。当たり前だ。わたしは初めから家族だ。そばにいただけで、支えになっている。それでも、キリルは寂しいんだ。……エラスト、さっきの質問の答えはどうした」

「離してもらえませんか」

まっすぐに見据えながら、エラストは後ろへ下がる。フェードトはうっすらと笑い、そんなエラストを追い込んだ。

「侍従は不自由な立場だ。そうだろう。恋なんて、その姿を感じたこともないんじゃないか。それとも、侍女を片っ端から抱いたか」

「……酔ってるな」

「あの程度で」

そうは言ったが、フェードトの目は据わりきっている。エラストもさっきから視線が定まらなかった。花のような匂いに騙されるが、口当たりからは想像できないほど強い酒だ。

気づいたときには、壁に背中が当たっていた。

「ベータである我々は、寂しさに鈍感にできてるのかもしれないな」

フェードトの手が、エラストの頬をペチペチといたずらに叩いた。

「それでも、わたしは寂しかった。キリルを見つめることしかできない。その寂しさを埋めようとすれば裏切りになる。わかるか。……わかるまい」

ふっと息を吐き、フェードトは体勢を崩した。互いの額がぶつかり合う。痛みに顔を歪めたエラストは、フェードトの胸を肘で押し返した。

手首を掴まれ、壁に押さえつけられる。

次の瞬間、くちびるが触れた。ハツとして、とっさに拳を振るおうとしたが、相手の力は想像以上に強い。

「……わたしはこう見えて、山男なんだ。岩場を登るのが特に好きでね」

「関係ない。離せ」

「エラスト。おまえにも、わたしの寂しさを分けてやろう」

「ふざけるな！ 酔っ払い！」

抵抗して身をよじる。その両足の間、フェードトが踏み込んだ。

「……くっ」

鍛え上げられた太い腿が布越しに押し当てられる。ぐりぐりと刺激され、そこはあっけなく反応した。

エラストは奥歯を噛み、顔を背ける。

ゲラシムがキリル以外との性行為を望まなくなったことで、エラストは発散する場所を失っていた。

うまく遊ぶと言うことができない性分だ。わざわざ侍女を口説いて関係を持つ気にもならなかった。

「確かに酔ってるかも知れないな」

フェードトが自嘲する。

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>